

夏休みを前にしたお願い

～ すばらしい2学期につなげるために ～

もうすぐ夏休みです。学校では子どもたちの生活や課題など、いろいろ考えておられることでしょう。そこに加えていただけたらと思い、今回は書きました。3つあります。

1. 戦争の話聞くこと・・・身近な家族や地域のお年寄りから

戦争（第2次世界大戦）が終わって77年。戦後生まれの人が8割を超え、「戦争を生きてきた人」は、少なくなりました。さらに、自（みずか）らの戦争体験を語れる人はわずかです。そこで、そんな話を「聞かされてきた」おじいちゃんやおばあちゃん、「体験してきた」ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんが身近におられる場合には、こういう方から子どもたちが戦争の話聞いて、家族みんなで平和について語り合えたらステキですよ。

先日、中主小の応援団のコーディネーター：田中さんが市教委に来られました。お話は「手投げ弾」のこと。昨年完成した増築棟の工事現場から80数個もの模擬手投げ弾が出土しました。陶器製の結構重いものです。どうも練習用に作られたらしいですが・・・。子どもたちの身近に戦争があったことがわかります。

私は戦後生まれ（昭和29年＝1954年）ですので、もちろん戦争体験はありません。でも、父親や近所のおじさんたちから、時々「聞かされて」いました。例えば、終戦間際の頃、あやめ浜の松林に飛行機（大津の海軍飛行学校の訓練機）が隠されていました。それをねらって艦載機（かんさいき＝太平洋側のアメリカ空母から発進した戦闘機）が何回か飛んできたこと。そのたびにみんな家や畑や藪の中、あるいは橋の下へ隠れたこと。残念ながら、その機銃掃射であやめ地域では何人かが大けがをされたことなどです。一人は片足がとれたとも聞きました。また、野田に捕虜収容所（多くがオランダ兵）がありました。敗戦直後、その捕虜たちが帰還するまでの2か月ほどの間、救援物資として米軍の大型飛行機から白い大きなパラシュートで食料などがたびたび落とされたこと。子どもだった近所のおじさんたちは、日本の敗戦後、「オランダ兵からチョコレートやガムをもらった。」「パラシュートのひもをもらって遊んでいた。」などと教えてくれました。また、野田の人たちは、戦時中もそうした捕虜の人へわずかばかりの作物を分け与えていたことなどなども聞いています。（そのおかげで、戦後の戦争裁判でここでは捕虜への虐待がなかったとされ、罪を問われる人はいなかったそうです。）

また、私が校長をしていた野洲小には職員室奥に文書庫があります。夏休み、時間があつたので整理をしていると、昔の学校日誌が見つかりました。（昭和20年のもの）めくっていくと、多いときは2～3日に一回「空襲警報発令」と一行だけ記してありました。戦争中なので詳しくは書かれていませんが、この6文字の後ろには、子どもたちを守っている先生たちのさまざまな思いがあつたんだろうなと思います。さらに、数年前の創立130周年記念事業のときに地域の方に教えていただいたんですが、野洲小（当時は野洲西小）にも大阪

から学童疎開の子どもたちが来ていたそうです。子どもたちは校区のお寺に寝泊まりして通学していました。大阪・難波駅のすぐ近くの旧浪速小学校の子どもたちです。三上小（当時は野洲東小）にも疎開児童が来ていたと聞きました。（三上小には当時の疎開児童の写真が残っています。）そのころ一緒に学んだ子が、今の小学生のひいおじいちゃんやひいおばあちゃんの世代です。食べるものがなくて、運動場にサツマイモを植えていたということです。

同じころ、隣の守山駅では7月30日の午後4時過ぎに、アメリカのグラマン戦闘機4機による空襲がありました。駅から出発し出した汽車をねらって、超低空からの機銃掃射。防空壕から首を出してこの飛行機を見た人（子ども）は、「パイロットの顔まではっきり見えた。」と言われていました。ここでは11人が亡くなり、22人が大けがをした大事件でした。でも、こういう被害はすべて「軍事機密」ということで、新聞には載りませんでした。守山の事件は、石山の「東レ」（当時は「東洋レーヨン」）に落とされた「パンプキン爆弾」（ナガサキ原爆の模型爆弾）に次ぐ滋賀県の空襲の直接被害でした。

さらに、今、大津の唐崎には「自衛隊の小規模な駐屯地」があります。戦時中は、ここから今の皇子山競技場にかけては軍隊の基地でした。私が高校時代（1970年ごろ）まで、いくつものかまぼこ型の黄色い兵舎あとがならんでいました。また、唐崎小学校あたりには1km以上の長い空き地がありました。それはかつての海軍飛行学校の滑走路跡でした。戦後25年たってもそんな「痕跡」が見えたんです。戦後すぐ、この基地はアメリカ軍に接收され、しばらく進駐軍の基地となっていたようです。私は大学を「1浪」しました。そのとき、先輩の勧めで「ヨット教室」のコーチをしました。1泊2日コースがあって、お客さんと唐崎近くのヨットハーバーに泊まるのです。そのハーバー付きのホテルは、かつて進駐軍の将校用の宿舎でした。戦争映画に出てくるような軍隊の古い個室の大きなベッド、寝返りを打つとギーギーとバネの音がしました。「ようこんなもんが残ってるなあ。」と感心したものです。

今、戦争体験者の高齢化によって「語り部」はどんどん減っています。子どもたちのひいおじいちゃんやひいおばあちゃんの世代は、戦争を生きてこられた世代です。そして、その子どもであるおじいちゃん・おばあちゃんは、そんな戦争の話を「うんざりするくらい？」聞かされてきた人たちです。でも、今、孫・ひ孫のためならそれを語ってくれると思います。

「遠くの」ウクライナの戦争と重ねて、「身近にあった戦争」を考えるいいチャンスだと思います。『戦争は最大の人権侵害である』と言われます。また、『戦争は最大の差別だ』とも。この夏休み、戦争と平和を子どもたちと一緒に考えたいものです。（就学前は絵本も）

あわせて、昔の生活や勉強の話も聞いたら素敵ですね。そして、それに続けて、子どもたち自身の誕生や名前の由来などを聞くことで、自尊感情の育成にもつながると思います。

2. テレビをみること・・・戦争や平和についての番組

最近の子どもたちはスマホやゲームに時間を費やし、あまりテレビを見ないようです。これからお盆過ぎにかけて、戦争や原爆、平和に関する特集番組も増えてくると思います。そこでこれを見るというのはどうでしょう。2月以来、ロシアがウクライナに戦争を仕掛けています。テレビでこのニュースが流れない日はないぐらいです。それが子どもたちが平和について考えるきっかけとなるのではと思います。

3. 夏休みに聞いたこと・見たことを作文に

聞いたことや見たことを文章にすることは、自分の考えを整理することになります。そして、文字にすることで定着します。きっと子どもの生き方を考える上での大きな宝ものになると思います。（中学教員としての私なら原稿用紙3～4枚は欲しいですが・・・。）